# 『栂尾御物語』備忘

柳田征司

『栂尾御物語』は明恵上人（一一七三―一二三二）が語ったところを弟子の定真（一一七四―一二五〇）が記録したものである。高山寺資料叢書『明恵上人資料第三』（東京大学出版会　一九八七・二）において、筆者は、高山寺蔵定真筆本の影印・翻刻を担当した。ここに語学の立場から若干の備忘記をとどめ、鎌倉時代語研究にそなえたい。難解な資料であるため、読めないところを多く残しているが、それらについては、以下に扱う問題についての掘り下げとともに、後考を期したい。

次に本稿で利用した明恵関係資料と、使用したテキストを示す。あわせて以下に用いる略称を示す。

『解脱門義聴集記』　『金沢文庫研究紀要』4（一九六七・三）による。所在はそのページと行。『解脱』

『光言句義釈聴集記』　『明恵上人資料第二』（東京大学出版会　一九七八・三）による。『光言』

『五教章上巻聞書』　高山寺蔵明暦元年写本。『五教章』

『高山随聞秘密抄』　『明恵上人資料第三』による。『随聞』

『真聞集』　同前。『真聞』

『明恵上人遺訓抄出』　『大日本史料』第五編之七による。『遺訓』

『却癈忘記』　『明恵上人資料第二』による。『却癈忘』

『五秘密口決』　『高山寺典籍文書の研究』（東京大学出版会　一九八〇・一二）による。『五秘密』
『栂尾説戒日記』　『明恵上人資料第三』による。『説戒』
『華厳仏光観聞書』　『鎌倉時代語研究』一（一九七八・三）による。『仏光観』
『明恵上人夢記』　『明恵上人資料第二』による。『夢記』
『華厳唯心義』　『高山寺典籍文書の研究』による。『唯心義』
『光明真言土沙勧信記』　三保忠夫編『大東急記念文庫蔵光明真言土沙勧信記総索引　本文篇』（一九七五・一〇）による。『勧信記』
『自行三時礼功徳義』　三保忠夫編『呉文炳氏蔵本自行三時礼功徳義総索引』（一九七五・七）による。『功徳義』
『明恵上人歌集』　小沢サト子『東洋文庫蔵明恵上人歌集　本文と総索引』（一九七六・二）による。『歌集』

（上1オ7）軽（カロシ）

動詞「軽ム」も「カロミテ」（上18オ5、ただし、大日本仏教全書本「カロシテ」）の形で見える。『却癈忘』にも「カロクシテ」（上10オ2）、『勧信記』にも「カロシ」（下495）「カロキナリ」（下498）「カロカラムヤ」（下500）と見える。

o↓uの音が注意される語としては、『栂尾御物語』にほかに副助詞「ソラ」（下5ウ2、下17ウ5）と「マロク」（丸、上29オ4）とが見える。「スラ」「マルク」の例は見えない。他の明恵関係資料には「スラ」形のみが見えるようである。[1]『解脱』三例（66・15、68・10、85・12）、『光言』一例（上174）、『唯心義』一例（7オ4）がそれである。「丸」は他の資料でも「マロ」形で見える。「マロク」（解脱18・3）「マロニ」（同79・13）「ママロニ」（光言上238、239、下永60）（円（マロ）ク」（同上512）「マロナル」（真聞三20オ1）。

明恵関係資料にはほかにもo↓uの音が注意される語が散見する。

ウゴモレル（89・14）カズフ（数、80・1、80・7、101・13、111・11、111・11、159・15）ソゾロシ（82・13）トツク（届、50・4、81・7、130・8）ワロシ（68・3）（以上『解脱』）

カズフ（数、上448）見トツケ（届、上505、505）（以上『光言』）

マトハル（五秘密上100）

ワロキ（却癈忘下1ウ6、8、9）

サソラフ（歌集19）マツハレテ（同45）

なお、高山寺蔵鎌倉中期写『大威徳法』（定真筆か、二〇一―七―一四）に次の例を偶見した。

二人姓名ヲウシロアハセニシテ蛇ノモノケヲモテツヽミテ岌尾草（ミソハキ）ノ皮ヲハキテコレヲカラケヨ

oとuとの行き来は上代から日本語の歴史を通じて認められるが、筆者は、それが起きる事情が日本語の歴史の中で二回生じたものと考える。一回は、上代特殊仮名遣甲乙二音の別が混乱しはじめた際、この違いを維持しようとして起きたものであり、(2) もう一回は、オ段長音の開合二音の混乱が進んだ時、これを維持しようとして起きたものである。(3) この解釈があたっているとするならば、鎌倉時代に認められるoとuとの行き来する例は、上代に生じたものがひき続き行われているものであるか、この期に何らかの個別的な事情によって生じたものであるか、いずれかであると解される。今後、そのような視点から検討される必要がある。

(1)「ソラ」「スラ」については、国語調査委員会（山田孝雄担当）『平家物語の語法』（一九一四・一二）後篇一五六〇頁、山田巌「院政時代の語法」（岐阜大学研究報告人文科学2　一九五四・三）日本古典文学大系『今昔物語集』一補注二三四を参照。

(2) 拙稿「上代東部方言の性格」（愛媛大学教育学部紀要第II部人文・社会科学一九　一九八七・二）

(3) 拙著『室町時代の国語』（東京堂　一九八五・九）

（上3オ3）**此義ニヨテ**

本資料には動詞連用形の活用語尾を仮名書きした例が少ない。ラ行四段活用動詞（ラ変を含む）の場合、音便形を表記したと見られる例は、次の例に過ぎないが、それらはいずれも促音を無表記としている。

ヨテ（上6ウ3、8ウ1）

アテ（上37オ3、下10オ4、10ウ3）

スカテ（下1ウ3）

原形であることが明らかな例としては次の例が見える。

アリテ（上6ウ4、下10オ8）　トリテ（上24オ8、三137）　備リテ（上42オ6）　堅ㇾ（原本「ミ」と見えるのは汚か、大日本仏教全書本「マ」）リタル（下11ウ9）　ヨリテ（下12オ3）　カヘリテ（三2ウ6）　ニコリテ（三6ウ6）

タ行四段活用動詞の場合は、「モテ」の例しかえない。

なお、「スカテ」の例は次の通りで、「縋る」という動詞である。

惣此疏ハ普通ノ疏ノ如ク文ニスカテ義ヲ不述我心ニ任テ自在ニ義述也

これと類似の文が『随聞』に見えるが、そこでは「スカリテ」となっている。

一大日経疏事惣テ此疏ハ普通ノ疏ノ如ク文ニスカリテ義ヲ不述只任我心一ニ自在ニ義ヲ述也（166）

（上4オ1）**マハシメテ**

明恵関係資料に見える接頭辞「マ」「マッ」「マン」の例を、その形と後続する音とに注目して整理すると次のようになる。

| 後続音＼形 | マッ | マン | マ |
|---|---|---|---|
| u | | | マウルハシク（光言上30） |
| uo | | | マオナジ（光言下257） |
| m | | | ママロ（光言上238・239・下永60） |
| k | マックラ（解脱77・5、109・7） | | |
| Φ | マッ初（解脱80・14） | | マハシメテ（栂尾）マハシメ（解脱74・10） |
| s | マッスク（解脱74・11） | | マスク（解脱80・18、18、81・1、2） |
| n | | マン中（解脱64・12） | |

後続音が破裂音（k）か摩擦音（Φ・s）である時は強調形「マッ」となることがあり、後続音が鼻音（n）である時は強調形「マン」となることがあったことがわかる。それらの条件の場合にも「マ」の形の方も用いられ、それは非強調形であったのあろう。鼻音（n）の前に撥音が生じている例に「真（マン）－字（ナ）」（勧信記下563）の例がある。なお、『明恵上人資料第二』光言句義釈聴集記補註「下257マオナシ」参照。

（上6オ7）**大覚ノ位ヲ証テハ何ヲカ授ヘキ**

本資料に見える疑問表現を整理すると次のようになる。

要説明の疑問表現

問い

1疑問詞……欤。

何故此aノ声遍一切諸法詮空義欤。（上37ウ8）

2疑問詞……。

極微ハ其何空。（三3ウ7）

何故多宝ノ二字ヲカク。（三11オ8）

3……疑問詞哉。

真言五智法界躰性智ト者何哉。（上1オ1）

疑い

1疑問詞……。

ナトワレラハ行ヘトモシルシモナキ。（下4ウ1）

反語

1疑問詞（……）カ……。

大覚ノ位ヲ証テハ何ヲカ授ヘキ。（上6オ7）

寂滅ノ真如ノ中ニ何ノ障导カ有ス。（上18ウ1）存疑。

2疑問詞……哉。

如何只十ノミニ限哉。（下21オ2）

要判定の疑問表現

問い

1……欤。

如是道理有証拠欤。（下13オ5）

2……哉。如何。

日来之願楽忘念ナルヘシ哉。如何。（上19オ1）

疑い

1……ヤ……。

若一分彼師伝ヲモヤ思出ス。（上42ウ9）

2……欤。

吉水ノ僧正御房熾盛光明堂ニ鏡ニtrūm字ヲ書テ懸給ルハ熾盛光仏頂タラニ経ノ意欤。（上13ウ3）

用例が少いのであるが、要説明の疑問表現において、疑問の助詞が文末に来る「疑問詞……欤。」「疑問詞……哉。」の例が注意される。このように助詞が文末に置かれるようになると、次のような表現も行われたのであろう。

ナ〔ム〕チニイカナル功徳カアルヤ。（唯心義6ウ3）

この例の「カ」は主格助詞「ガ」とも見えるが、次例から見て、係助詞と見るべきであろう。

此五教章何故ニカツクルヤ。（五教章1オ2）

（上10オ2）**近クウタク雖抱**（イタクト）

「抱く」という語が「ウダク」「イダク」両形で見えるのが注意される。他の資料を見ると、『五秘密』に「イダク」（上128）「ダク」（下4）、『真聞』に「イダク」（本2ウ3）が見える。『勧信記』には複合語「タムダク」（上74）の例が見える。

マ行音が後続する例では、『歌集』に「ムマレアハム」（生、129）「ムマノクソタケ」（馬、一四七）、『光言』に「馬」（ムマ）（下永54、下70）が見える。[1] ただし、「生まる」は「ウマル」表記例も少くない。

なお、語頭濁音語としては、『光言』の「ドチ」「ドコ」、『解脱』の「ドコ」、『仏光観』の「デキ様」「イ（右傍補入）ダシタル」が注意されてきたが、『明恵上人法語』[2]に次の例が見える。

仮ニウツル影ニハカサレテ生死ノ夢ヲ見事ノハカナ（サ脱か）ヨ

(1)光言句義釈聴集記補注「永53世間ニモ下蔦馬ヲマト云ハ」参照。

(2)『金沢文庫研究』一六三　一九六九・一一

(上13ウ2) **吉水ノ僧正御房熾盛光明堂ニ鏡ニ trūṃ 字ヲ書テ懸給ルハ**

格助詞「ニ」を二つならべた例はほかに次の例が見える。

正月廿三日夜ゆめに三条白川辺とおほしき所に北のつらに候小家のすたれをかとにかけて候所をうちさまへ見いれ候へは（勧信記670）

ただし、『栂尾御物語』の例は、上の「ニ」は「懸給ル」に、下の「ニ」は「書テ」に、それぞれかかっているとも解される。

(上13ウ7) **惣シテノ通用ニハ**

接続助詞「テ」に格助詞「ノ」が接続する例はほかに次の例が見える。

設ハ人ノ形ヲカクニ先打任テノヨキ人ノ形ヲカク（下3ウ6）

明恵関係資料から例を引く。

○何事モ内ニトカナクテノ上ノ事也（遺訓597・8）

○仏法ト云ハイカサマニモ重禁ヲマホリテノ上ノ事也（同600・3）

○チリハカリ仏ニソヒタテマツル手アリテ｜ノ｜上ノ事也（同600・5）
○イカサマニモツクリナシテ｜ノ｜上ノ事也（同607・15）
○信心ヲ地ニシテ｜ノウヘニ智恵モアルヘキ也（却癈忘上6オ13）
○無量ノ大所得多カレトモ、セメテ｜ノ｜事には在家ニテ無二無三ノ信者ニテアラムハ（同上7オ2）

『平家物語の語法』後篇一二七〇頁にも用例の指摘がある。

（上14オ3）曩（上声圏点）莫（上声濁圏点）トヨムヘキヲ連声転声ト云テ数〻トカキテス。（平声圏点）ス（平声濁圏点）。ト云カコトシ云、

「連声」の語は『真聞』にも見える。

一瞿摩夷者　クマハ牛也　アイ糞也　アイト云ハ ma 字ノ第二点也連声ノ時クマイト云トモ別シテ尺スル時阿夷イ具ニ出スヘキ也云、（11オ4）

「曩莫」については、na-mo〉nau-mo の変化[1]を言っているが、割注には連濁の例をあげている。なお、『解脱』の次の記事が参考になる。

悉曇ノ例法。梵音ニ漢注ヲツクル時。正音ニマカセテ。其ノ音ヲ定ムレトモ。読之ヲ一時。其声相続スルカ故ニ。去平清濁軽重第等不定也。種〻ノ二字ハ皆ナ。清タル音ニテアルヘケレトモ。正ク読時。種〻ト云カ如シ。（92・17）

（1）「曩莫（謨）」の「連声」については馬渕和夫『日本韻学史の研究』II（日本学術振興会　一九六三・三）八七頁参照。

（上16ウ1）**クセカマシキ**

接尾語「ガマシイ」の例として明恵関係資料には次の例が見える。

○是等ヲ心ロ不ニ得ニシテトモスレハ文点ヲヨムナント云ヲナニトモナクヨムハ、タ、我口カマシキ也（光言上341）

○此法モ五仏頂八大仏頂ナント云時ハ以外ニ様カマシク五辛ノ香アル家哉（真聞三3オ3）

なお、「カシカマシ」（解脱67・3）は「カシマシ」に「〜カマシ」がかかわって出来た語か。

（上18ウ1）**寂滅ノ真如ノ中ニ何ノ障导ヵ有ス**

反語表現か。もしそうならば、「有ス」は「有ムズル」とあるべきところ。存疑。ただし、「ムズル」「ムトスル」の「ム」を表記しない例は次のように散見する。

○クシラニナリタラムニ。渕ニハイカヽヰレスルト云ハムカ如シ（解脱66・18）

○人カスナラヌミノウヘニモ、ナヲ〳〵ウルサクマキラハシキコトノ侍ヘルヲ、ノカレトスルニ人〳〵イサムルコトノアルニヨメル（歌集56）[1]

「ム」の無表記例については、『平家物語の語法』後篇一一七九頁、山田忠雄「誤用・稀用・奇例の処理―今昔物語集の語法研究のために―」（解釈と鑑賞　一九六三・六）参照。

（1）小沢サト子「国語史上からみた明恵上人歌集」（国文学攷68　一九七五・八）は、脱落が無表記かを考え、脱落とする。

（上19オ6）**思察セムスルハ**

本資料には「ムズ」の形しか見えないが、明恵関係資料には「ムトス」の例も散見する。歌集詞書きに見える例は前項に引いたが、ほかに『華厳一乗教分記』（第一部・二二〇）の明恵自筆の奥書にも、「ムスル」と書き、「ト」を補入した例が見える。「ムトス」の形が、歌集の詞書きや奥書の文章中に見える点が注意される。『五教章』『仏光観』では「ウス

ル」となっている。

（上19オ7）**仏教大益ハ但浄一心ヲムルニアリ。其浄ム者ハ先過善知識テ聞也**

傍線部は連体形「浄ムル」とあるべきもの。次の例が参勘される。

○又モ不見キ事ノ哀サヨ（栂尾御物語下15オ4）

○斧ノオノレカ木ヲアマリ截ホトニ自ラツフルカ如シ（光言上77）

（上29ウ4）**物忿ノ時**

この句を含む「字輪観事」と題する一節はほぼ同文が『真聞』三19ウ以下に見える。物忿はいそがしい意。「物騒ガシ」を音読した語とする説があるが、存疑。「物サハカシ」の例は『光言』（上472）に見える。

なお、漢語の和語化した例としては「装束ク」の例が『解脱』に見える。

是ハ人ノイシクコソ。装束カネトモ。ハタカナラテ湯帷ニテ。装束タルホトノコト也（125・1）

（上30オ2）**大智印云フ智ヲ為躰也**

「ト云フ」の「ト」がない例として注意される。ただし、大日本仏教全書本は「印トモ云」とある。類例として次の例が見える。

○而善知識ニ尽命モテ親近セヨナント云ハ如此ノ心等ニ師モ弟子ヲ引テ入ムト思ヒ弟子モ入ラム思ニ取テ善知識ト名ハアル也（栂尾御物語上31ウ6）

○仏ケアラタフトヤ思ヒ法花〻厳等ノ経教何ト義理ヲ知ネトモ（説戒2ウ3）

光言句義釈聴集記補註「上59知リキハメハヤ云ハ」参照。

（上32オ3）**此師ヲ敬ヒ此師ヲ愛スル**

「愛スル」という語が、弟子の師に対する感情として、「敬フ」とならべて用いられていることが注目される。

（上38ウ4）**mahā引本躰ノ如クナラハma（上声点）hā（平声点）ト読ヘシ。如此連続シテ読ニハ正音ナラネトモカヨヒテ声ノ読ルニ随事アリ。辟ヘハ此辺ノ語ニモサテハトカキテサテワト読カ如シ**

いわゆるハ行転呼現象に注目している。この記事は『真聞』の本文の方が理解しやすい。

mahāハ本躰ノ声ハマ（上声点）カ（平声点）トヨムヘシ。サレトモ連続シテ正音ナラネトモヨムナリ。即マ（上声点）カ（上声点）トヨムカコトキ也。タトヘハ此辺ニモサテハトカキテサテワトヨムカコトシ（三9ウ7）

（上42オ3）**木真言師達無左右顕ト云テサケ（上声濁点）ウト云テ深ト思ヘルハ**

無造作に、よくも考えないでの意の「無左右」という語は明恵関係資料によく用いられている。

○故ニ律ニハ。初心ノ行者ニ。無左右。空無我等ノ法門ヲ授ケサレト。云ヽイハレタル事也。（解脱26・7）

○如ノ此ノ文ヲハ無左右。初心ノ者ニハイヒ聞スマシキ事也。（同39・12）

○而ヲ世間ニ。孔子老子等ノ教ヲ以テ。無左右。空仮中ニ当ルナレト云事アリ。（同97・1）

○但シ学生真言師ニモヨラス。云甲斐ナキ凡夫ナレトモ。三宝ノ境界ニ向テ。無左右。アラタウトヽ思ニ。此真実ノ理モ。得ラレタルコトモアル也。（同111・8）

○戒トイヱハ定トイエハトテ。左右ナク偏執スカラス。（同143・8）

○此ノ事ハ初心ノ者ニ無ク左右聞セムハ心ロクルシカルヘシ（五秘密上58）

○左右ナク法門ヲサツクレハ身語シタ、マラス（遺訓602・4）

容易に、簡単にの意の例と見られるものもある。

○其ノ諸仏菩薩ヲ信スレハ。無ク左右ニ文殊ニ同スル也。（解脱67・16）

○成不成ヲハ不ス論セ。無ク左右ニ功徳ヲ得タル也。（同153・4）

○成不成ヲ不論セ無左右ニ功徳ヲ得ト云ハ。先ツ心一境性ヲ名テ為ス定ト。（同153・11）

以上の例は副詞的に用いられた例であるが、連体形の例もある。

一切ノ仏井ハ画像木像依仏眼真言大日真言之加持力ニ生身トナルコト真言功能左右ナキコトナリ。（真聞一22ウ6）

（上42オ3）**木真言師達無左右顕ト云テサケウト云テ深ト思ヘルハ如法ヲカシキ事也**

全くの意の副詞「如法」は明恵関係資料に散見する。

○此ノ於利他門中不欲行障ナムト云モ。是等ハ如法微細ノ障（サハリ）トモ也。（解脱50・2）

○如法サシタル急用ノアリシ時ソ、ヲノツカラ人ニトラスル事モアリシ（却癈忘下1オ6）

「如ク」に呼応して、「まるで」の意の例もある。

金剛界ノマタノ字ヲ観セヨナト云ヘルヲ如法ニ眼ニ見カ如ニ現前令ムトスルホトニ（却癈忘上2ウ7）

『平家物語の語法』後篇一四三一頁、光言句義釈聴集記補註「上41如法」参照。

（上42ウ10）**鈔之**

「鈔」「抄」ならびにこの字を含む漢語の用例を次に示す。

○建永元ー五月十一日午前於宮原家抄之了（真聞三31オ5）
○先師引此経試行者ヲ矣仍謹抄之ヲ以為亀鏡ト（同四11オ8）
○先師引文令見給之間抄之了（同本9オ7）
○イマコノ記ヲ鈔スルトキ安貞七年十二月ノ廿六日（勧信記下637）
○同［廿］二日ヨリコノ家ニシテハシメテコノ［抄］ヲ［ツ］クル（唯心義10ウ1）
○義海ノ顕人法章ノ文ヲ略抄シテイハク（真聞本12ウ8）

光言句義釈聴集記補註「上277抄物」、山口佳紀「国語資料として見た明恵上人関係聞書類」（『明恵上人資料第三』）参照。

（下2オ2）**六塵悉文字ト云ハ此義也**文字マタラト云事也　水瓶タトミ等文字ト云ナリ只人ニヨマセムカ為ニカキアツメタルナリ**スヽメカラス等ノナタモ皆悉ク真言ナリ**

後にも次のように見える。

六塵悉文字ハ此ハ被此差別水瓶畳等也（下14オ1）

また、『随聞』にも次のように見える。

六塵悉文字是法界実相ト云ルハ此謂也惣テ文字ト云ハ斑也ト云事也火鉢火箸硯墨畳還如此ノ諸法ノ彼此差別ノ相ヲ文字ト名タリ（337）

『光言』にも次のように見える。

脇足鼓カ文字ニナルト云（上453）

明恵が、講席において身のまわりの物を例にとってわかりやすく説明することは既に指摘されているところである。『栂尾御物語』の例は「水瓶」から見て夏、『随聞』は「火鉢火箸」から見て冬における講義の記録か。

次に比喩・ことわざを若干引く。

○譬ヘハ能クウチワヲ作ラムモノハ。日本ニ作ラムモ。唐土ニ作ラムモ。タヽ同シヤウナルヘシ。若シタカハヽ一人ハワルキ也。夏時唐ウチワヲ持シ給フ。指之ヲ譬トスル也。（解脱151・3）

○一ゝノ相好。一ゝノ毛孔ヨリ法雨ヲ雨テ。一切ノ刹土ニ於テ。一切所化ノ衆生ニ充足スト云。是常説戒ニモ申ス。風ヲ能クヒキツレハ。中風スルニ似タリ。（下略）（同52・4）

○此ノ可説不可説ノ義ハ。ワタノヘ河ノ。海ニツヽキタルニソ似タル。（下略）（同59・4、ワタノヘ河のこと77・2、81・6、113・8にも見える。）

○世間ノ戯言ニ。トシアケハ廿ヨト云コトノアルニ。思ヒアハセラル。（同118・9）

○一ヲ聞テ十ヲ知ル（光言上39）

○ワタリニフネニアヘルカコトシ（唯心義7ウ3）

○人マネノクマノマウテトイフコトワサアリ。マコトニ一人発心ノ心アラハ諸人モマタマナフヘシ。（勧信記上571）

○コレヲ撥無シテ万行ノ因ヲイトヒテ仏果ヲモトメハツノヲシホリテ乳ヲモトメムカコトシ（同下389）

（下2オ5）**タモ**

この資料には「ダニモ」は見えない。「ダモ」もこの一例だけである。他の明恵関係資料には「ダニモ」しか見えない。『解脱』（50・8）『遺訓』（606・8）『却癈忘』（上2オ4）『歌集』（61）がそれである。

「ニ」がnを経て消失していると見られる例としてはほかに次の例が見える。

栂尾御物語　ナド（副詞何と、下4ウ1）ナド（助詞何と、下15オ4）ただし、助詞は「ナムト」と表記されていることが多い。

解脱　ナシニ（何しに、83・12、180・13）

五秘密　ナシニカハ（何しにかは、上101）

「ン（ム）」と表記されている例は、「ナムド」のほかに次のような例がある。

栂尾御物語　ナン〳〵（下10ウ9）

解脱　ナリンタリ（151・17）

光言　云―何カ（イカン）（上109）ナン〳〵（上427）

真聞　異シテ（コトム）（一17ウ5）

勧信記　ナンゾ（上319）

功徳義　いかむか（15ウ2）なんの（16オ4）

（下2ウ6）**カタワウド**

「〜ウド」の例としては「カツヘウド」（起信論疏聴集記十本）が見える。

（下4オ7）**宿曽**（ムカシ）

この前後の文『随聞』217行あたりとほぼ一致する。『随聞』（書陵部本も）は「宿習」に作る。「宿曽」がよいか。『仏光観』に「宿トハ曽ト云タル心也。ヤカテ曽トヨム也」（3オ2）と見える。明恵関係資料においては、「ムカシ」という語は「昔」と書くのが普通のようである。「宿曽」は依拠原典の表記によるか。

（下4オ9）**ナカ〳〵**

かえっての意で用いられている。明恵関係資料に見える「ナカ〳〵」の用例を次に引く。『光言』『却癈忘』の例は省

略する。

○譬ヘハ仏像等ニモ薄ヲオスニ。初メツカタハ。オスニ随テ次第ニキラメキユク。至極オシキハメツレハ。中〳〵キラメキハナクシテ。シトリテ見ュル也。（解脱121・7）

○高僧等ノ神異ハ不思議ニテサテヲキツ、中々志シワリナキハ、神通モナキ人々、命ヲステ生ヲ軽クメ天竺ニワタリ、又仏法ヲモ修行スル（遺訓602・7）

○昔ハ一人智恵アレハ、所依トメ証果ヲモシキ、証果ハ中々学聞ヨリヤスキカタモアルラン（同604・5）

○末代ノ比丘ハ破戒ニメ（中略）実ノ仏法ノ味ィハ、中々在家ニ流レユク（同608・13）

（下11オ4）**其ヨリ後ナニ事ヲモ我身ト思ニヨリテ腹立テ物キフ物食ムト思モ皆ナ我身ノ為ト思ヘリ**

推量の助動詞「ウ」の例と見られる。凡夫が、我欲にとらわれて、心に思うところであるので、口語形が現われたのであろう。しかし、「物食ム」の方は「ム」と表記はれている。明恵関係資料では「ム」が用いられており、『仏光観』に下って「ウ」の形の方をよく用いる（ウ四例、ン一例）こととなっている。

推量の助動詞「ウ」の成立に関しては、解明されなくてはならない問題が少くない。一つは、『万葉集』の字余りから見て、相当早く成立していたと見られるmの形が、どのような力によって院政期に入ってuの形に転じることになったのかという問題である。そして、また問題となるのは、「ウ」が見える早い資料において、なぜ一般に「ム」を用いながら「ウ」が稀に混じているとう現象を呈するのかということである。『極楽願往生歌』の例のようにそこに「ウ」が現われなくてはならない必然性が認められるものは問題がないけれども、他の資料の場合にはそのあたりの事情が説明できていないのである。

前者の問題については、筆者は、ハ行四段活用連用形の音便が促音便からウ音便に転じたのにひかれて、マ・バ行四

段活用動詞が撥音便からウ音便に転じたことが契機となって、助動詞mがuに転じていったのではないかと推定する。[1]このことを証明するためには、今後mu>m>uの変化全体を広く調べる必要がある。今、明恵関係資料の関係する例を整理しておくと、次の通りである。

ハ行四段活用動詞連用形音便　活用語尾を仮名書きした例が少ないが、原形とともにウ音便形が散見する。

払(ハラフ)テ（五秘密上38）思ッタル（随聞424）ハウテ（這、歌集137）

マ・バ行四段活用動詞連用形音便　活用語尾を仮名書にした例が少ないが、原形・撥音便形とともにウ音便形も見える。

ユカウタル（解脱81・7）

漢語の例　ムサウカル（無慙、光言上195）ムサウナル（無慙、光言上306）

和語名詞の例　タカウナ（筍、歌集151）

後者の問題については、基本的には文語体の中に口語形が顔をのぞかせているものと考えてよいのであろうが、「物キフ物食ム」のような例を見ると、口語形が顔をのぞかせやすい条件と、そうではない条件があったのかも知れない。更に進んで、u形成立の遅速がかかわっていることも疑ってみる必要がある。マ・バ行動詞のウ音便の場合、語幹末母音がuの語の場合はm>uの変化が起きにくかった。推量の助動詞の場合はu音に接続することはないが、a・e・iの間にu化の遅速があったことも考えられる。ただし、現在の乏しい「ウ」の用例の範囲からはそのことはうかがえそうにない。なお、「ム」が無表記となっているとされる例[2]は、「ウ」の無表記である可能性も考えられる。

(1)拙著『音韻脱落・転成・同化の原理』（油印　一九八四・三）二五八頁以下、同『室町時代の国語』（東京堂　一九八五・九）九七頁。

(2)山田忠雄「誤用・稀用・奇例の処理」（前掲）

（下12オ3）**断**トイハ

明恵関係資料では「トイフハ」が用いられるのが普通である。

（下14オ4）**又**モ**不見**ヰ**事ノ哀サヨ**

明恵関係資料に見える「形容詞（又は形容動詞）の語幹＋サ」の表現には、(1)単純名詞、(2)「〜サヨ」による詠嘆表現、(3)「〜サ」による詠嘆表現、(4)「〜サニ」による原因・理由の表現の例が見える。

(1)の例

サカシサ（解脱93・8）　長サ短サ（光言上173）　大サ（同下224）　タウトサ（遺訓595・5）　メサカシサ（同604・6）　ワルサ（却癈忘下3オ13）　ムツカシサ（勧信記上188）　ウレシサ（歌集2）

(2)の例

殊勝ノ法ニ値遇スル事ノウレシサヨ（仏光観3ウ1）

此法ヲ「終」（修か）スル事ノ難有「サ」（右傍補入）ヨ（同4オ7）

仮ニウツル影ニハカサレテ生死ノ夢ヲ見事ノハカナ（サ脱か）ヨ（明恵上人法語）

(3)の例

マボロシノサトヽコソキケヨノナカハウシツラシトモイハムハカナサ（詠草十一首）[1]

(4)の例

ソノハヽカラシサニ、エヨマヌ也（却癈忘上17オ11）

竹林薗ノタケノハヤシノコヒシサニ竹林竹トナツケテソミル（歌集83）

諸法無我ノ松ノアラシノサヒシサニ是非得失モワスラレニケリ（同102）

（1）『墨美』二六九号（一九七七・三）に影印されている。

（下14オ6）**墨染衣ノ打キテ**

大日本仏教全書本は「ヲ」に作るが、『説戒』にも例が見える。

起信論ノ講シ給ニ絶言（3ウ11）

ただし、こちらは撥音に後続するから、条件は同じでない。

（1）山口「国語資料として見た明恵上人関係聞書類」（前掲）指摘。

（下14オ6）**又モ不見キ事ノ哀サヨナト思テ有程ニ高尾ノ金堂ノ前ト思シキ所ニ墨染衣ノ打キテ法師ノ形成テアヘリ**

文脈からすると、法師の形をした人が、語り手明恵に遭ったという表現になっている。

（下22ウ2）**ヤカタ**

「ヤカテ」の転化形。大日本仏教全書本は「ヤカテ」に作るが、明恵関係資料には散見する。光言句義釈聴集記補註「永74」参照。その他の資料における両形の現われ方を次に示す。

解脱　ヤカテ（21・18、85・5、111・16、129・1）

　　ヤカタ（111・11）

五秘密　ヤカテ（上48、52、91）

遺訓　ヤカテ（610・1）

却癈忘　ヤカテ（上5ウ7、13ウ8、15オ3、21ウ1、11、下2オ10）
仏光観　ヤカテ（3オ3、17ウ2）
夢記　ヤカテ（116上3）
詠草十一首　ヤカテ

（三）7オ6）**タトヒヲ以テ云ハ**

他にも例が見える。

是物ノタトヒニ被仰之（却癈忘上22ウ10）

日本古典文学大系『今昔物語集』一補注一八九参照。

〔**付記**〕本稿の一部は、これを鎌倉時代語研究会（一九八七・八）において発表し、種々教示を得た。